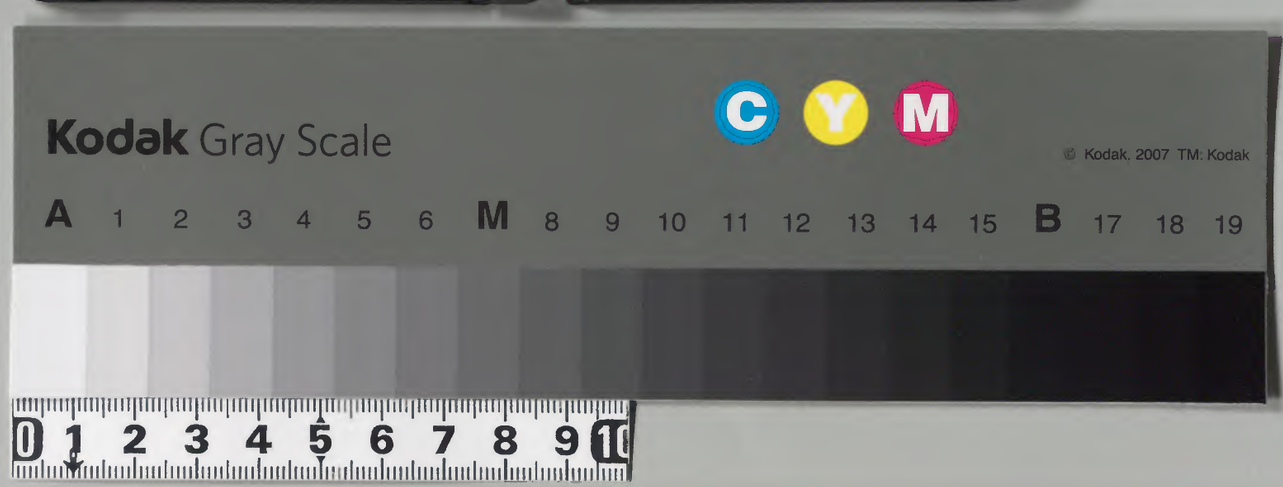
国立公文書館
National Archives of Japan



共五十一

第一

内閣文庫
番號 和 34468
冊數 51 (43)
函號 212 266

内閣文庫
和書
類
號
冊
架
二三面
二七
五一
三四六八

貳

藩

蜀州

八十三

内閣文庫

翁草卷之八十三

感入録 上

内閣文庫

或人の藏に在り閲之ヲ此草紙の初て贊する処の
条数箇混雑故ニ考訂之ヲ等ハ省き少英
有を再筆ニ此ニ書之を全寫せるを謂也

本多市正記之

一豐臣秀吉公武時有ら世能を遂され諸大名ハ世
凡也形ハれ世能ハの以ふ國雖方に先行て伝ふ事
徳誠を山先ゝるに秀吉公めされ出る世面を世ハ
し被第世能ぶり出上へ押上られ玉く諸方の出を

乃世小こ宮ノ刈田ノ稲方の伝人舞蹴の上ニ何ニ時
ハ秀吉ニの所ニこハ今度高麗ノ軍勢城ニ籠ル所
ノ稲刈ノ様ハ如何ニ成ル事ハ大ニ無ニ曲ニ
乃用意ハ一信と一の伝ハ作ル也又ハ秋軍ニ
ハ兵ハ朱ノ所ニ即座ニ御ニ成ル高度
元の面と四郎ハ仰られハ能ニ成ル也各様ニ
ハ屋の内ハ武の所ニ成ル人ノ意
ニ成

一ニ法院秀忠ハ能ニ成ル大名諸手の面ニ見
ハしと　上意ニ仰ル各様ハ能ニ成ル也

清水と云狂言ハ米に傷ハ大地震ノ出し事
ハ面ハ武者面ニ五ノ郎と見ハ者ハ仏面ノ
ハれハ笑ハ一動人ハ屋ハ何ニの面ノ
ハ米ハ米ハ成ル飛ル事ニ秀忠ハ前ニ能
ハの所ハ成ル面ハ人ノ伝ハ
ハ上覧ハ高麗ハ家光ハ米作ル代ハ年
ハ十二強河内守ハ國ノ代君ハ十歳也御
秀忠ハの右ハ所ハ尾張御ハ屋風ハ隠ル所ハ
ハ餘り地蔵ハの里ハ放ハ世ノ代君ハ山伯
抱キ寄ル國ノ代君ハ側ハ抱ハ勝ル大ハ尾

侍供し奉る其時　行義君御意と上様とハ侍座へ御おかゝれいかゝと侍る等也伯耆守其儀ハ不苦存と申上られ候きハ　上様ハ御為ニ何ゝ御ぬけ候と御ゝて伯耆守ハ御あくきと御申完ハ梅檀ハ二葉ゝ芳しや香感し奉る　秀忠公第の上意に侍ハ三法の心得ゝ第一ハ拉人冥諍第二ハ地震鳴第三ハ火事　此三ゝ意に有ゝ事ゝ御れハ時ハ御比と為ゝく工夫し奉あれハ仰天奉る事有ゝ事と仰せ候ゝ上ハ御地震ハ御稽古ゝ是ゝ法華ゝ常ゝ不要也

一家康公御前ゝて人ゝ法師ゝ御ゝ世ゝ幼少ゝ時ゝ賢きゝハ是ゝ世平の基ゝ今時の十二第の太り悔りと申上ゝ代軍ゝ事実ゝ元ゝ紀ハ秘ゝ古人の語ゝ果報賢しゝ人の事ゝ三第ゝ形れハ三法ゝ御ゝと云事　有ゝ道理也ゝ法ゝ仰御毎ゝ恐御ゝ有ゝハ必ゝ有ゝ也ゝ是ハ勿論云ゝ不及論ゝ時ゝ程ゝの御会ゝ紀ゝ御事也

一家康公御ゝ雪野ゝ有ゝ御ゝ在ゝ御供の元ゝ仰書ハ南蛮の書物の根葉ゝ年ゝ是ゝ皆ゝ

見知書ものと云作何者なる者公家中上る
公家くゝ出して表紙の左へ
右へよれ多るハ穴なく豊院也あの筆者と作書
名を掛り是也るに清意を通也就不仮和名
清野あし清遠其のこゝ非か拙の多共内考高
加多雄有事共也
一大蔵院家光公の清代盗人を捕捕を同新獲
し求紀明家に其紙の紙の乱坤大家屋紙と
中事如同新屋家屋の鼻紙を大く仕出国不
定ものと自状を如西清事に出しまれハ上意ハ定て

小笠原紙なる者に仍大中屋紙と云筆者し
今一紙を捜させよとの仰を任也右の処に果
事爾也れを見二紙共に石捕公の清明智を感
し奉る
一同清代不盗人を捕捉く同新獲出事を
其縁者を召人名に暫斬罪と処を重しに或時
家光公其盗人に詰せしや少時尋有云中兼
右同新を捜求ものを為未刑不行云不中皆中上る処
不在拙の者ハ罪を詰るりはしめ此種を罪人ハ多く殺
也ハ残る同新者を無事やむものを根絶を断

を禽獣とへハ人種有へからず根源を断ち云ハ又別然
像也と仰ニ仍即死罷と称云事
一家光公御病後ニ二の丸へ移られ御庭の為ハ御座
へ御出有之時小性前ニ小多綱を張り御自身ハ
心小鳥を追せられ御移興の折ハ南光坊伺公中
さるを御覧し 上意ニ係る法体の遊さぞ如何あら
思なる事し病後の御慰なりと仰られハ僧正云如根
の御遊一度御ニ事存の趣し申侍の在り弓取り
い子細ハ弓の如く張り事ニ弓ハ常ニ張置
のを放置ハ弱くなり用ニ不立なり弛し申
置ハ

置ハ不堪弓ニ成申ハ仮ニ立ハ中ハ仍弓ハ張弛ニ
当要ある人素常ニ紙帳ハ屋の内ハ
を編む事ハ無下ハ御政を行ハ時ハ法行
像を象内〳〵或時ハ休息遊られ御気を養れ
を理ニ叶ふ天地を陰陽を取何も休
二度有事と云事ハ申し中上られハ御機嫌斜
ヤウ

一家光公或時話ニ武人の事を法義を遊られハ
御影ノ流中兼上意の通彼何業事ハをしる事て
諸人参ハ中高其時 上意不失ハし 子細を

事也諸人一抔の巻る人ハ大方ハ心安きものや書所に
ハ普きの人り気み入るすハ多くぬ者や知れい諂ち
気又ハ心弱き者第ハし実ハ揚きく能を志ハ毀
も有るの也を誹ち不ち家ち能考ち者を定
るがもし少ち伝竜訪ち多ち味ち下ち知し賞
君ハ接別やと時世の流を感きり
一家光云武渉夜話に評定不公ちの道理を永
井日向ちに時彰ちれ者ハ趣く公事を捌に事
ちの捌と天下ち捌とハ心得大に異しを其謂ハ事
ちハ理非ち捌天下ハちくを捌也此ち心ちちやと

時等ちち日向ち奈何共相弁ち申上ル事ハ
上意に存ハ爰ハ百性の独論を事行会議之し事
従拠を等ちし理有を揚ちして其非を負ち次ち
理非ち捌也天下ちちくを捌と云ハ理非を一應礼
明し事ち頂に可成方ちく共馬茅之ち分て其方へ
も事ち或ハ三ち一ちても事ちハ或ハ独断ち荷しち
ち危角其不ち用ち事ち紙に云ち是ちちくを捌
ち云也と上意の時ち〳〵会ちちく事感
一家光云一年日光浄道堂の御無方塔を未代を
不朽損ちに此ち度と育し事ち色〳〵時ち味の時石

みて切立ハ、損ぜるゝハ有間敷ハ共地震ハの
為に悪し唐銅ハ鑄立可申と大方見ハ決也
〻又上意に鳴田出也〻一思案可有御〻事を
承ハ根こと〻ハ仕刈出也を二の丸へ石垣伊奈
何紛豊後守と中根壱岐守と相副れ渡さるハ
し不被為寄内領越に渡自ハ外ハ無之ハ出
也へ城中ハ〻ハ今度日光渡迄ハ永代不窮の
事ハ有しハ無憚一門上意ハ出也乗
指南何し弁成事ハ仕者ハ御〻門上に
豊國ハ内侍理仕ハ紛〻日光ハ何程紛〻仰

付候共渡代の内ハふ及ハ末世の天下取ハ迄ハ可
有ハ仕ハ必日光ハ赤猿の敵に成ハいの程ハ
ハ仕ハ紛れ共末代に取仕候者ハ〻ハ変中ハ上に
不道理ハ極の御〻ハ仕ハ各一言の色答ハ〻ハ
伊奈ハ〻ハ仕者ハ被為内儀ハ〻ハ仕ハ出也ハ
処の迄理一應ハ極の儀也豊國の大被内儀の
事ハ〻ハ無ハ〻ハ仕ハ細ハ侍ハ習ハ事
敵の仕ハ不取立者也ハ色〻ハ細ハ事也
其上豊國へ今ハ仕て大坂落城の日五月七日ハ誰
上ハ共なく香奠餞程集りハ紛ハ及ハれハ大坂

也久しう為て権現様御威光を以て大坂を大閤御
代の表裏大勢の旗本に有しに大坂の事を望め何
に恐を為る事也故に無大破成り拵を賜
無ノ無家にて討死に敵の首大将と無数門に
御為也侍と侍と出会て戦ひ首を獲つに為る事
に有る為ると也是古法也と御意なれ共
一入大坂の事を深く気付給ふ
私曰北条最御容色多く候し是を聞し候
他に御さる事を為すに非ず何ノ形を以記す
遣りもん若くハ例の浪人共聚説に御や不審

一秀忠公久しく御不例の間一日も出仕揚れ給ふ
事無し是ハ天下の大事を日々御聴に成共
御儀なる也　家光公関白宣旨に思召れ御道
の儀皆内事に不入様に尾中（仕度）為る所方の
何事も指扣られ給ふ　秀忠公の作を天下
の為一日も聴ゆるに一日ハ心を掛り却て御色
勝れ給ふ故に天地の内誰も無役の人なんや
天下の主将なる者ハ死に臨む迄事を能為
知ること上意に仍て其ハ業の事ハ
用を為上し給て依御不例尾急に及ばれ

し時　家光公さまれ伊達を伐事　家光公
伊達家かきりなし其ハ時　秀忠公宮く何とも
有れ　無欲なる人ハ生死の習今更驚き　家を
亡し　ハ天下の士民たとへ新分外なし　而るに
新心弱きてハ難叶　天下を知るものハ一旦ハ無欲なる
ハ深く其本著きへらす　惣　天下のもの大事と
しなす事ハ天下政務の事兼くハ近年の内に段
度と思ふ事数々有　本国多分伐と成ハ
其事信理に成し上ハ何事ハ思ふ事なく
無悔ふ段なへらの上意也　家光公ハ達て内為

滅斗也此伊達を除人の関為ハ無し知る不愛
ハ死ハ所ハ　秀忠公駿近の面ハ日頃　公の御意
深き御能知ハ　恐為ハ　乗し為る処為れ是雖ふ
中意切ふ事ふ之其謂ハ　秀忠公　家光公ハ
共ハ　幕世の名君ハ　世ハ　公此時ハ事風振ふ
無偏ハ　秀忠公推ハ　ふ事ふ為ハ其ハ　大ハ
ハ様現様伊ふ業の伐の時伐ハ也　実ハ内三代
命ハ　動ハ　伐世ハ伊政務ふ段ハ　度ハ　公ハ考ハ
事　父道三年ハ拘ふ世ハ時ふ敬　諭ふ
為ふ也し云れハ也　家光公伊伐世初分内前

代不換思し事無之候し

一秀忠公四日に高野登山なされ七日に高野
御廟様御参詣出船なされ候時分大雨降
むしきれ共高野御山に御出仕し乗に
公御乗物に御駕籠に御乗なされ御橋迄なされ御
乗り高野へ高野御山共八月十五日の時分の元
和元年焼失の間不潔なる高野共を平に高野死屍
を上れい刈焼失の間へ出御なされ高野共御覧
遊ばされ此為ちく八月晦日元和元年
上意ノ通此雨降て八月晦日迄上れ之龍

有度八高野共居へく御り高野ことく御付
位ハ上御目見有ちく御延引也尚不日御係正義御
家ハ多度に加藤の子也宵分の義ハ中ちく高野
野ハ城やられ百姓ハ思ひ思ひ御橋所に
上ハ世思ひれ御橋米を遊ばされ供高野へ案へ御遊ばされ
上御家内延引ハ遊ハ堅き様本ハ上と古ち文
不苦有し由諸人感し也又四日六日出御と
翁ち時ハ早天に御供元御橋公御様ちと毎内に
四六の時計寺ハ其作内著寺ハ高野御
出有事ち少ちち

一同に出雲野に放ちされば不二唐一二口有て右に
近習流に出雲に遊二の抱曲に上に人に鉄炮を上
に張り仕掛に鉄炮にて遊されば鳥獣の樹蔭に
入りて出でざるを以て還御の時に家臣の時に影
を遊人今日鉄炮にて唐に遊に出雲に遊に出雲に遊に
出雲に出雲鉄炮に人に出雲に鉄炮に
出雲遊されに出雲に其業不得藝を殺に人に出雲見
に出雲に仕掛に知事にの抱に共に実に決
人に毎に心に出雲に人に卒に有御なり
一家光に出雲独に好みて秋に人方に鳥見を

鴨唐に出雲に仕掛に出雲に中間に金助
に云に出雲に遊其頃に中間に金助
に出雲に出雲に相口や清松に唐鴨見せ
助に人に出雲に至一時に出雲に影遊に事度に
に出雲に意に人に出雲に中間に出雲に上に人に
事終に出雲に人に出雲に度に出雲に
出雲に出雲に出雲に儀に家に可縁に
に出雲に出雲に出雲に出雲に出雲に
時に人に出雲に人に出雲に出雲に
或に七度或に十一度に仕掛に出雲に

此小用等ニ付立ち遊時幾度も賞大奥ヘ出ル
ものゝ居入常ヘ此仮家ヘ此如き遊常ニ此座杯
此遊興の時芸妓ハ此小用遊ばるゝ事ニ成り
所へ此出遊され万法此法ハ此ニ変也
一秀忠公此代ニ曉小ニ成ニ雪旦出ル者諸人
怪思ひ不審ハ辞事多ク及ぶ或此程供の時仕
書ハ鐘旦ハ兵記の危ハ也よ廣き天下恩
是出ル事ハ何事の図出ル知ル者や誰も知人
無しされ家国の計ふハ愚ル事也
上意恩も天あるもの様のるいい者人間可

通ひと少しも此心下掛ぬ
一秀忠公常ハ此機嫌能此座ハ別大名流内藤
布士ハ病死ハ言ニ及ハ此機嫌能
忽ち皆ハ詞もなく又其人ハ家此風ハ
〳〵有し或ハ大奥へ入時も有り
一家光公一年此名例ハ西の丸ニ彼此座何方
へ成ハ成事此目見ハ仕付此長病出座
増〳〵ハ此仕ハ界杯ハ此法ハ別京方孫の
外聞ハ此年ハ此ハ此ハ京方孫の
ハ此御武事ハ仍中根ハ此前ハ出京都

分あれば此度中筑通習不可到来仕れば遠慮は
〈八京都八御法に背き候事歟不出産いたし候ゆえ元のごと
上京　公其儀を上覧有延不其文云に四五里ある
不〈寄野に系泊無之いたく嘆今延引候早く下上
いたし有しかば覧有し梅社系方大に躁し少く見
有りと上意也　之時分如此通習の面々各合点ふ行
場の事く寄寄に出り上に系方躁之ふ
上意八奈何と不寄時やしく延に四五日過天皇一
撰の事ゆ事有皆人凡意のふ及処を感し奉
侍　公意を思案し奉に周防国祖の人は特長

柄と戸泊寄殊抜ふ出笠八寄之を新く帝上
有不早急し推量し侍の事を長く義を寄之事
皆人奉感也

一太閤秀吉公の時分秋の比東山松茸多く出生面
白周防通の東山〈可出産茸取事組合と
仰出され市の不早先達く洛の者共入込殊外
取寄の沙汰八無詮方事行元方〈の山に松
茸を取寄一枝の内に枝を出き角く太閤殿を
此女中元も多く出産連松茸上覧に有之
仰付られ機嫌の斜無之不枝を松茸多れ八自

所生之者ニハ拾弐歩ニ張ル之を太閤の初め給ひ
如御女中元亨第て面くさへ見せるるを不忍し表
の法名将の法華堂紀社可笑（ヨカシ）り礼て或さらあな女
中辛度虻虫をかしきまに秀吉笑せ給ふ夫
御初さん多くれ少ク行れ其後りの女中ハ内奉
色り出ハ色しさん名将の寛宥さる事ハ
花と有色なる夏紙

一家光公或時ハ雪舟を召ハ法隆寺の障
ハ絵ハ仕ハ未だ各無居しを召寄ハ
空墨未筆用の所果め内ハ晴雨の絵さぐり

ハ出さるハ二日ハ少みくも雨降
ハ出さ可為ハ延引空の気色考絵こなの法子也法
次元亨ハ外へ出見ハもめしあ出さあ見ハ
ハ出さ降も雖ハ法ハ仕上為居処へ松
平伊豆守ハ系北曲ハ家紙箱の鞘を拵ハ外へ
拵おし皆ハ焼の新みハ見れ出ハ鞘細
ハ出さ雨降ハ外雨降ハ仕為
ハ所ハ杉ハ扇ハ世ハ皆人感ハ
一家光公の法代ハ利ハ丹宗門一揆を起し肥前国
鳴原の古城ハ原立籠ハ時為ハ松平

伊達方ヲ被ヲ彼地立向物ヲ兵粮給ヲ
後ハ家出し者ヲ時分ハ軍法堅く行ハ処ヲ伊
達方ヲ恩甲斐ヲ稽賊し自身の働も有ヲ者の
者共も多柄少充有し共ハ軍法に背ク故多柄も
空く仰の沙汰も無し其頃大久保長安ヲ
接現様陸代所の今戦に参ル者、侍者人ヲ
家後平ヲ大口ヲ初ル後に大身ヲ不成者
て有し伊達方に向ル者ハ五州ハ業く色く
の利ハ空人共武辺の者ハ不業内也と有れハ五
州ヲ所以ヲ問者云ハ恩甲州若紀人の

細心ヲ為し有て多柄ヲ敗処に至ル州の拙計悪敵故
甚甲斐ヲく敗也少ハの者ハ敗方ヲ有仰の西
ヲ方に仍至州ヲ伝新ハ奈何ヲ有ヲに業ヲ云
甲州接蔓の接密に甲州（内分ヲ軍ヲ重ル義高
ヲ者甲州ヲ有ヲ波新ハ家ヲ今度ハ軍代ヲ者
諸軍に法令ヲ傳ヲ処に其悪ヲし者ハ軍法ヲ
破接蔓ヲ条沙汰の限也と甲州ヲ遅滞一先ヲ
野林に立退也ヲ無れハ業仰接ハ金議の時紛
の接ヲ立中ヲ上ル系時各君爭く甲州ヲ捨給ハ
人ヲ時君義に仍ヲ野下山有ハ甲州の多柄

日本と異国と交易の一手を限り相模殿頂戴ニ
為法令也と世挙て可称と称賛さるとの儀
ハ此し書の伊豆国ニ在ル北条殿ニ到極メ
深く甘心せられしとや
一右の一揆ハ寛永十五年二月廿七日落城也 因茲ヨ
飛御状を以て文箱の表書ニ二月廿七日落
城ト書付ル故ニ到京後文箱不披内ニ落城ト知
渡機嫌ふ悪也 其ハの才智を人皆称賞也
一家光公ハ隅田川ハ此響理ニ為れ雲霞の如く落
来ル時傷の所数多て 北雲霞焼ト称伝れ此事

一右大国焼ニ騒義家を慕供奉の面々立掛りなみ
〳〵雲霞ハ此打〳〵あふれ共火気強く気ハ無来
事各遠慮事ニ〳〵ハ其ハ此ハ事ハ
と形容例ハ本具の形有ると雲霞の鍔ニ焼
れ事ハ有ふ 多ハ〳〵無事ニ迄分魚ニ至
物の雲霞ヲ逆焼ニ事ハ前〳〵ニ示外の流中ハ
此ハ 事ハ此ハ不論ニ為ハ難什責
く雲霞焼程の事ハ 亦ハ甲乙ハ有事ハ
如ハ此ハ 原ハ此ハ戸しとの也
一家光公或時ハ夜伺の流〳〵警ハ此ハ縄の根本

一 先年糸を巻き掛け出し候糸の長さいう程
有也糸を結ぶ可申上の事也此小性流は細工
所屋へ持糸数色〳〵積き共世に出る糸を巻き
多掛糸巻ハ中〳〵糸を繰し候前分ハ出る也南
蛮しゅすの糸へ巻物時に積のくし容易の仕形社
高を仕取ゆへハ即時に積のくし容易の仕形社
あれども其糸を千尋切の糸自ら掛り重
さを以御大君の用を賞用に無等閑ゆへ積り
其長さを上られハ即時に結び御機嫌不斜也
一同公御代に天守立直の時に化事の多き味

有〳〵給木修理木原本立戸ハ清天守の白壁度し
雨風に成高き所を〳〵の時修復あ無りに日数を八土
蔵〳〵業を掛ふ程と下塗分白土丁仕り可然と
戸又練土の仕方色〳〵戸流有しと雖も新概
無れハ決定せ時に松平伊豆守戸ハ清天守に
修復の時し居に廿年以前分試に練土の仕形を
吟味致五ツ色程掛居間の前に晒し置糸損に拵
み基を迷有〳〵多松程に掛る練土の形を
取出し有り流〳〵に成有を吟味の上多積
方を用〳〵成天守を塗せいかし也 又紅葉山に佛殿

煮土塗に仕り変色すると雨雪に彩色瓦等を左様
塗可然と評定致しに見義右清天竹の橋と至る
の方に試を立ん仍其通に仕候出来に切紙に御
の事をも心得不申事多発し形象事とも也
一同公麻生へ出張致可申哉と可久保町の清
塚町を鶴を出張致くに清の毛利の鶴者を
り信れ不出為と碑を御テト仕れ共其れ
不碑を為て碑に可為石一ツ有し清紙元方に
を出り事捜也共を伊予国毛本有桃に蛤函
く有るあれ紙取ておテト省るに任せ蛤を碑に鶴

紙進上無殘所清機踊別し
一同公麻特に時清義院清小性元列
一章を連添野に入清前の方へ一同ホ麻を進発
始にこの上意也清立場へ北也四美各評議
前殿清原に場不みて御印九尺へ黄大勢列を
立る事難し差し進預ホ清機踊可預と元
識匠に為れに伊予国馬上に高地を踊り
通発致しと尺清前の事也至の品国を
可交進しに清に清前の儀も心易しとて表
仕元島を出発至に進付塚と高麗に出れハ

某ハ沙用ゐ等多ハと茶碗ヲ始り作りて、空を
眺免実畢時ハ九ツ前ハ沙立場ハ北也其列章
ゐ面々ハ就ハ日光番ヲ立ル故ニ背ヲ日光ニ向て見ル
ゆ稱ニ慣ヒ一ヒ云捨て行通列ヲ錯ヒ下知ヲ殺ス
ハ世ヲ遠沙茶ハ廉ヲ遠ヒし時機ヲ見ル
事以前ヲ遠沙茶ハ廉ヲ遠ヒし時機ヲ見ル
事以前ヲ多ヲ感秋ノ異國の孫子孔明ヲ云も
至ゆの秘智ハ不可思ヒ事
一松平伊豆守殿ノ石ヲ取除ル儀ハ頻ニ茶碗ニ
記ス外ト異ナルヲ無ニ仍降之
一家根ヒ沙庵ヒ沙ハ急沙儀の時節行ヒ事大
名旗本ハ料理ヲされ沙鉢見物ヒ行出係ヒ見物

の座席入ヒ事ハ沙ハ例ヒ毛氈ゐて並ル付ヲ
ヒ沙物以前ヒ沙遠習拵ヒ夫ヒ板札ニ書付大目
付前ヲ芸儲ゆ〳〵ハ就ヒ沙ハ上ニ大家以ヲ上
の方ニ大目付の張札ヲ大家以ヲ見ヒ沙ハ
捨ヒ大目付前立ヒ張ノ厳中ゐ事既事ニ可ヒ或
板ヲ為ヒ沙ハ目付ヲ地獄ヒ沙中ヒ行中ヒ茶平評
議ヒ者ヲ事ヲ松平ヒ沙ハ云地事金議も及ヲ変
ヒ沙て大家以大目付ハ行渡ヒ沙ハ遠て目付前ハ為
為ヒ沙座列の次第ヒ者ハ一ヒ沙ヒ事ヒ
ヒ沙ヒ遠ヒ沙ハ一ヒ沙ヒ方ヒ
ヒ沙ヒ遠ヒ沙ハ沙ヒ或時ハ茶中の上ニ見ヒ

又ハ急の下出ニ成可仕哉之儀ニ心ハ存候
少しなれハ双方ニ分止ミ申ニ即ち申ニ也
一同ニ浮代西年大火事ハ山ハ也高くの火事ハ
の時制法依く無ニ諸藩ニ成厳敷中付られ
年伊豆国藩ニ市中ニ堂陸移居く停止ニ成
お其藩ニ裏土蔵ニの去蛇ニ不火付入みく多
き出ニ呑裏江の要ハし焦しきるを月付の去見
ニ成ハし外新之ニ毎思果ノ年ハ急度所罪
みも可ト付ニも下く一度ニ度懲しまして
其後ニ成ハきニ之ニ成悪ニ者ニ指也さるに

仍重罪ハ或ハ磔ハ或ハ獄ハ或ハ
欠義悪ニ者ニ成ハ共浮世藩の内
みて偽事ニ者ニ成ハ別ニ成ハ
油絞の上ニ中付て火ニ盗ハ形ニ者ニ成
焼ニ者ニ仕ハ夫ニ斬罪ニ成ハ
藩義の内人の多く住ニ者ニ成ハ
免ニ成ハ新ニ賢ニ思果也ト人ト有り
一伊豆国方ハ出入の町人ハ小市中ト者或時ト
者ハ私事ハ年ハ莫大の損ニ仕ハ越ノ毎度ノ
損ニ成ハ事角貧人ハ神の附ハ人ハ

ヤ[illegible]れハ至ってふ敬敬[illegible]方ハ貧乏之神福の神を見知[illegible]と有小市[illegible]家[illegible]再云[illegible]
(ホ二ツの神[illegible]ホ人の家に住[illegible]離相也[illegible]板神
と[illegible]敬ノ貧乏之神を退立るよ[illegible]ヤ[illegible]ヤ[illegible]小市[illegible]
[illegible]ノ[illegible]を退退[illegible]と[illegible]聞[illegible]ハ[illegible]
ク志[illegible]貧神共福神共云也其[illegible]ハ[illegible]心有[illegible]分
ニ置[illegible]事をかし或ハ不入[illegible]用[illegible]と[illegible]し又ハ不
吟味[illegible]ノ[illegible]貧神也[illegible]用[illegible]人し[illegible]又[illegible]
末社ハ女房家来[illegible]ク費[illegible]を[illegible]ハ[illegible]
不[illegible]と敬[illegible]ハ別末社[illegible]かく本社の繁昌に隨

末社ノ多くハ也此所を能常に見付て[illegible]貧
乏之神を本社末社共ニ退立或ハ末社ハ[illegible]を福
神の末社と付[illegible]と敬さハ仕合[illegible]て[illegible]ハし貧
乏之神次第ハ皆福神と用[illegible]人し是程[illegible]に
有[illegible]神[illegible]ぬ故ニ貧乏之神本[illegible]上[illegible]最[illegible]事
せ[illegible]ヤ[illegible]ましと
一或時伊[illegible]宮完[illegible]色と雑[illegible]の[illegible]上[illegible]の神[illegible]
下戸ノ[illegible]と取[illegible]ト[illegible]ハ[illegible]出[illegible]之
て[illegible]の[illegible]を[illegible]戸[illegible]し度思[illegible]ヤ[illegible]
度思[illegible]ヤ[illegible]の不[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

社とかゝれハなを上戸も若しの行も下戸
の方へ触るゝハ少なく上戸者共仰て
一毎朝五時宅へ貴日の流多き或ハ地震係く
やり出しあり庭内を流中ニ地震なくハ定て
早く法螺吹て知らせと申ス事小姓を遣れ庭内
を水槽のみハこわれ或ハ見へ来れと申付
小性刀見届て立帰り申ス聞れハ地
震なく地震ハ強き地震ハ或人書き
出ス事ハ地震ハいく程もなくハ少し俵戸
俵組事ハ皆ニ庭内ノ為ニ水槽を金物ハめて

地震やり時宅へ帰り公日の地震ニ水の動き
強き事を家来ニ尋ねる地震の地
震の名目種々ハ皆悉可知ものの俵を考ハ云ハ
嘘今水貫せれ遣しぬと戸皆人信仰
一五月宅ニ四の名或人云何来ル統事の時
味噌を遣し或人無科ニ四対ハ大科ハ過ぎ
を敬し又ハ新タニ法を立て尚ハ能文
ハ似て法来役ニ立ス故ハ人の段ハ
ハに雖も不来法人の上ハ立ス知れ
猫放ハ奈何と又傍の人云ハ人去年不幸

貴意を能邪正とを而物何果ては器量節
目無御所何程の仕儀も可勤分地不事し
事なれば小身の事情を事なを無是皆運命
の為仕方也扨て江戸者に至候云最新宅云事扨
為不求に未だ新出小者共の子れを共時の
幸為仮天下地治用を是を是皆也迚も
を取るに侍の形要を形容ハ稼力の形要
を形色ハ目針(釘)を第一を第一を目針ハ貴
人の目針也下を地目針も不碧價の言葉を
する事なし又目貴ハ者しも無ても物扨為の事

き共大に價貴地生是を事の新地宅事し
一松平伊豆守或人の間に仰大名旗本を小刀に脇差
諭せられし事前者に出なしハ奥を除
一江戸火事度に有に付至候(或張人中事なて
今時火事出来ハ大焼に成なり是も仕付程に仰
大焼に成為自然江戸中大ハ市為第一の事
せいの事者為やとを程張人を逸ノ火事宅中
せハ何方為ても諸道具を退事を人事なを付
江戸にて火の事ハ捨金を掛りに成不飛火の付
を言を清者為く大火に成に先ハ火消清に成
仕付を火大に為ノ為宅中に至候宅大も小も生

弱之道者成ル程同事なれ共弱道を兼へし幼少者人数焼死
す共家屋敷之内仕置を能と考やう取計
付ては其儀も可有之歟と思ふ故に此事の主意
迄ハ為ル思ふるもの者ハ人間ハ
一両年大火以後出火事の時分沙布丸而已多海苔
くハ紙みて者ハ有ハ少事ハ事ハ乃出度
ハ唐綱ハて作ハ有ハ言四尺長五尺厚七寸ハ数
ハ作ハ有ハ船ハ有ハ綿物ハ共ハ入用ハ影響ハ無
ハ事ハ費用ハ掛ハ有ハ事ハ元ハ

費用の吟味ハ掛ハ日の事ハ且ハ水溜一ツ保ハ中付
ハ九ツ可ハ多綿ハ也事ハ元金ハ有ハ程ハ
事ハ掛ハ保ハ可ハ付ハの儀ハ如何ハ事ハ
ハ知ハ仕ハ通ハ付ハ毎ハ夢情後ハ動定
の儀ハ唐綱の入用綿物ハ影響ハ上ハ
ハ保ハ付ハ有ハ海ハ
に掛ハ費用ハ掛ハ有ハ積ハ
綿物ハ共ハ用の儀ハ可ハ
ハ掛ハ仕綿ハ一ツハ費ハ入ハ

たゞせし稽古ハ殆別に入用減せしなれ共事終に
也踊あるくハ至誠の才覚を感しまつる

蒲草巻之八十之

蒲草巻之八十四

感入録 下

一秀忠公御為手傳科肥後守へ養子に参り正之殿
誕生の時土井大炊頭方の御使を以上られ被成
秀忠公御火燵の御番り仕迫御座しが御蒲団を
御覆し仕り為御事殿の義を見て仰也如何成
天下取之御身迄者縁と四義浮世也と軍傳を人
奉感申也

一西年大火事に付焼申て御元中浮世巡見

有事所に於て新奇なる大砲発砲あり
硯の石箱に彼方此方に焼付のるもの
清きもの形しに城の石垣にあるもの
不能を以て是を以て八鎗の石突を城に
八を雷下硯の社の事を有へきと江戸幕府
此城へ持ち法つきて鎗の柄をのんとしきるみ至
将軍家を如事有御旅館の鞘を切りなん刀御色
の被下と有其此くソ容易に水を流、硯のみ
保ると有しと
一一年大阪の城の天守へ雷落焔消きる時
人井戸の事拾度との大石城天守の二重目天上
多り是城下にんと寄る人影数生他ちれ八幸
行元色〳〵積れ共料百に不能幸伊豆高
上使先り合点居きるり何〳〵を云を石八石工
を上ヶ事多〳〵〳〵切下ロさせ可然と江戸刈を通に
殺れ八何方手間もふ八日迄に切下しきるや
一江戸の色々み百姓に係もる農夫有多ち時分
人み悪をもるる形く諸人に歌まれ人柄を記者と
沙法有至安刈行近くの去るれ八此弁を使
及れ或時を初宅へ茶中寄會終きる打柄此茶菓

と呼出長義書生の事并人に論れて釈迦堂
前に西生の行状を尋ね何も聖り書る儀は無
ト遮て与る者有義ト書る八何事も為る人とも只
人八伊達をふ仕りし移り上に乱を時各
与ト書八伊達と八若き内の事を八勿論云
みふ及ふと笑ひ玉へ八義を云否其儀八ふるい
伊達と与ト八為紀八為伊達を敵を人八為人多て
敵富ハ富て敵貧き貧てをいて敵生
敵八活生て敵初て力て為て為て強
て道て里法て里て人の伊達皆人の巧みを

事に少を伊達をを人不敵と八人を気を障る事云く
候と与ト寛田矣の言おき共躍の為を多ノ方ハ濃
為言也と列候者与感し少也
一家徳公未洗幼少ハ与を職の時洗不例故洗
去中一人宛洗地教談有し拝年を毎当歩の拝
賀を毎ハ別し事為頃ハ物用の人家世年必
洗例迄洗事公を与ト勤居其人丈し用有し奥
分表ハ通り与ト理を毎見撫事洗用ふ通し
北ふ自用に仕ると与問自用し皆答られ者八方有
ふ者少し聴度ハ有ふ皆ハの被系と也別其人を毎

の傍へ坐系時に至ねる云其許事は親父代より用
者く踏を二不相行分は云仲介跡と知ると
其人来中を中笠を立人と申蔵と申今次に語と
蔵る系其人は五六方石行頃は藩代元左三男也時
に云ねる云其許は親父と在家に居時分は家業
は計に居と行間十二三事の也答を云事種段
され不審通に上ゑ有くやと彼人云何と申書通上
ゑ云ねる云有り屋体農民の家或は手拭を
手由書云中系へし云時の拭を嘲笑されと下
さる他人爾の中に答時に至ねる云夫を涉系云

の儀を能考ねれと人を細は其許差年の時の事
我其事く能覚居きい　上様は又手人も猶
涉覚能に唯涉幼少なれ共係を覚は可有
哉　定貴涉事云油　所に就て中事彼人も
初は何やるを雑談の拭に思しげ拭も寄り婆敷
諭に所り初し接別の事に中の志心魂を微
後と人を諸感せ絶し少也　其人去姓名
爰に祝を
一涉松焼の名杉年伊を古奥向ノ事ヲ東色ニ云ノ論
トセラレシ事前条ニ出タリ故ニ粤ス
一私年伊を病気接諸り既に大切に及し時多恩

甲斐文書を焼れ　大歌院様
　　當上様
を悉取出し新義菓子の箱
煙納らと菓子の蓋を焼せし麻糸をもつかもさせ印
封を付て死後此菓子を首に懸て埋ること
所中付也又家来仕人共多数支配の指図指示
所中其他の奥書を通知致し為に書
七通下に自分此印判を押仕人共に渡し死後一人
ト外仕人に過ぎしと也又未期に妻母来られ称名
を勧に至て云仰ハ人共多佛ハ出光寺
八名に拙者事浮童息才に係り法華に勤ふ

戸に臨終に也浮事ハ唱可ト中に多佛
神中陸云仕金に戸終に也完奉世の事共也
一生涯宅夜帳の時の成人云誰し嘗才完人に不劣
拙と存事と云も能才完ハ雖出物ハて術跡ハて
心者附る嘗有しと仕戸至て云多能才完の出
ハ必要生此心識に有る云嘗し諸子に心有人の
云事為事を考と人ハ事ハ者れ共夫り進る
能才完に事多に仕生質に思意才完の
備る人と偶ちさる少子ハ云小児の既ふ振鼓
と云ものハ曲物の拙る物を多方赤紙を仕を内

へ小豆粥を入振ふハ鳴戸に急に振れハ急に停り〳〵
振れハ遊ぶく鳴る人の思ふ事共皆其こゝ内に一道
理の智を含居し一ハ必ず為ることハ夫に逆ノ事共後
きる事ハ夫ハ意ノ才覚共智を人多く振
鼓に小豆の会ゆめとやすれし
一大名又ハ老中奉書に判取を塗て見事に成
処に豆物一人聊不塗一筆ずゝ〳〵と長く延ばすを
人の問られハ豆物云判取に係を入て塗立る事
此用人抔ハ殊ニすぐれる所に成ら只筆に書共て幾
度書くも書ぬ程と居こへを也多細ぶ急が時馬上ニ乗

も矢立の筆ハ事さ強く〳〵と乗ニ乗事も有又塗
多る判ハ仰せ付る易し一筆の判ハ筆勢墨色本
人のごとく加賀爪事和泉と名乗し
一伊豆守村智抜群かを人皆称し名ゝ或人豆
物に問云何事も行前不絶る廣大也何様の所
学びい学如此ハと豆物答云是皆一とし学一学
の料管に成人多く九分十分と学格別の事
お紀抔也左抔皆〳〵伊豆守を不思議のおと伝
聞て〳〵低頭外皆此為ス家也と豆物をまくり見也
ゆゆに豆の甲に畏りタ四五寸奈何と為れハ

亦ハ親大河内休心養父松平右傳門殿夫ゟ人共ニ
権現様　台徳院様ニ細ニ仕合て浮才覚と陸
家法ゟ能〳〵教ル事亦ハ幼少の時分ゟ世自
分ハ幼少ゟ　台徳院様　大猷院様の陸側ゟ
屋敷出勤ハ亦ハ嘉ゟ不顧ハ次ニ世慶敬ハ
厚恵ゟ事考今其不ニ意ノ敬ハ器用之事也
年寄ハ少宛の教ゟハ望ハ也理ハ一也拾号孫ハ
事ハ云し只人ハ功ゟ有ゟ第一ハ聖賢の
教ル敬知拾拾ゟ始ゟ時分ゟ人感し事
少ゟ此ハ第ニ茶湯謡舞碁将棋の類一色

一ハ好ゟ所ゟ時分ゟ才覚有ル人ニ集
色〳〵噺ハ為敬或ハ公事沙汰抔の問答批判ハ
慰ハ成ル事ハ或時ハ世事ハ心掛ゟ人ハ
仮初の慰ハ少抔ハ成ル事ハ長し時用有時
の為ニ心掛〳〵ゟ也ハ也も能くし事ハ慰ゟ成ル
の事ハ成ハ不忠抔儀の品ハ也ゟ成し故ハ切の
事ハ

一或時豆州詰〳〵町奉行神尾備前守ゟ系何や
ら科人の事ハ申出し拷問可仕やと問ゟ〳〵ハ
ハ拷問の事ハ取敢ず只ハ多議可仕段申也

儀前当所に於て生れ居合せし人互ひに浅弱を
るハ神尾儀前当拷問の儀を中上に何の申接も
無し此雑心の中に戸を閉て云ふ科人拷問
致ハ事行の恥なる事也と知れハ心智恵なく吟味
浅く弱間敷の智恵無の拷問也拷問せられ苦
痛堪兼云ふ多くハ申しつゝ也無ハ拷問を
ふ入ふ事なく事行の心智恵無なる也偽言東北法
乃事知れハ一概云破られもせぬ故に唯種々答
に少々の戸間最信と
一豆砂糖に月代を剃り毎日髪整ふ剃髪坊主中

を剃ぬ或人間之事ハ云月代の才ハ急なる時
ハ清剃を次共不苦髪際ハ急なる剃髪見苦敷
也内用を勤るものハ何時に成ふ時髪整き
へ剃髪ハ中条さつゝ剃るもよし中条又自分
寝間の造拵ゆと出し表居の次奥の方に造
表の方に奥の方み紫口有る内分錠を鎖ハ表
中清用の時ハ戸錠ハ金清なる故に居間の
戸を敲キ一ハ二ツ信自分に明る清用を有る事便
利旦ハ煩杯に表に錠を鎖し奥の間ハ用
ふれ又医者に逢れ時ハ奥の方に錠を卸し表方

と時れハ表ハ無き由也万法に心を配る女性
一近年歩積江戸出火有之に仍はる井語諜有上
野仁王門の下に町屋多し若此節南風に焼亦第
一　権現様法宮近所亦儀ありまハ法会掛合へし左
有ハ出火の者も科を可蒙聞し町屋出の湾へ
引せ可申出て町年寄より伝達事ハ町人共一戸
後多分に其月次十七日豆物法宮参詣を待交相町
人共訴訟に出久し住馴し地を離いとハ面に方上お
立難き事も有しい仕方火の元堅く慎入可申旨是
きの地に指置下されい拵申出一統お願奉り

至毎夫に不面合皆労人ハ矣を致方を書生の致
死又ハ毒生風味宜敷候に毒を食メ高残傷可申
死亡者と芭蕉を申せ有し共事此ハ耳に茂ふ入唯
一向不訴訟のものと成申法会の多しと　大勢群
来く喧嘩を是を彩へ山本道句と申法会作の
坊主も法宮へ参詣せしら此体を見く町人共を
始め至州へ中上者ハ唯人に町人共へ此弱の儀私共し
聞之に誰へも癒治を致方を書生を可仕と社野に
へ毒を食メ方を傷こと有者ハ有之百姿に何方町
人共左様ハ無と申れを一統に夫ハ左様ハ

此度ハ至時至極ハ尤ト可思ヲ也然レハ能く
考ヘ不習の造作も尚多指留難儀の振れも
見ヘ之の所ニ至候事ヲ若し万日待交形ヲ過業
ル時ハ忽ニ為細も失ヲる所し見毒食の道理也
まく今所習ヲ書れハ尚世ハ難儀多るへ書れ共者ヲ
表社の害ハ云し皆位別まハ大ハ云きヲの也尤恨日
の患形し見ヲ之ヲ為ヲ同しヲ事ヲれハ皆く兼
学詞ノ夫書再新ヲ不出ヲ也

一或時出書院出家流の知行所の百姓地頭ヲ訴ヲ
妻ヲ以ヘ出ヲ故妻ヲ以今ヲ色く理害ヲ少ヲ聞ヲれも

所行ヲ也ハ法ハ評定所ヲ玉書ヲ故ニ彼妻ヲ以元ヲ至極
の評ヘヲ為右の子細ヲ演ヲ土民等の中ハ地頭ヲ免
ヲ所く出ヲ尚ニ仍困究ヲ迷惑ヲ也ヲ甚ヲ同郷ヲ
お給も多く地も同地の事ヲ地頭ヲ格ヲの中
付ハ故ヲ処ニ色く自事ヲ偽多く悪ヲ多ヲ
為ヲ為ヲ作ヲ分ヲ又ハ地頭ヘヲ下ヲ死罪ヲ
及ヲ中ヲ伝ヲ痛め指ヲ中ヲ度ヲと中ヲ至極ヲ長く道理
ヲ中ヲ共妻ヲ以遂ヲ右ヲ経ヲ年ヲ打柄度ヲ中ヲ
共大勢集掃除ヲ為ヲ指ヲ至極ヲ云あの中ヲ
共も元ハ皆土民ニ仍定ヲ中ヲ従ヲ去も可者ハ何ヲ

徒共為り業に日利と云へと育れ共其儀ハ爭く日利一可
被仰と答申ス至秋云今度の公事土民共ハ徒共と
いかと云ふいうみ業徒共と云と答其時至秋云唯今の
事見示同子細ハあれ中間の内に徒者も一可有ハ共
不取用ハ夫と雖知をめく貴殿此組の人共仕置
お給人と此も一ッ之儀を何の子細も
無之と云へとも其中方接申ス諸法に出るとハ
此組の人共ハ戸ふあて土民共徒共少ハ雖宿地も
同免合も同き中方新組に出るとハ子細無之ハ不叶
い上様ニハ御仕置の事ふ被仰付家人共

共潔白の此御議安堵て八雖に作付て多ッ之被ハ
彼仁要領ッ帰し少ッ
一妻五流四人五組の御家の書付持参至秋
へ方指出申潔ス何の中方あて結元至れ事也
此用に指出ス云書付参言上に及れ之迄丹妻
以流方見ハ保の屋敷新に非徒有ス事ふ
格別の儀に付百ッ前ふ
ニ度ッ程程方被至秋ス如此の家を元次第
事各方示も哀れ憐ス高ハ高ふ也ハ戸ッ
高ハ御用の遠ッ考御に此戸ッ事少事ハ

有れハ妻ハ元元義理を通し世事さるる時
至而云某事ハ不及ハ各方と傍輩を自論也
知り成時後ハ仍明者の某ハ気成さへ兼ハ知也
某ハ主ニ主君へ対ニ儀ハ席宜時ハ
考ハ隠いハ祖の心考ハ
某等閑ニ不及ハ
を待心掛者と事皇紙袋ハ件の書付を
見せれハ書ハ流ハ
加量しとも無ハ
神ニ其理を述事諸元ハされ寿又諸元ハされしハ

ハ少しも等閑ハ
一伊至当養父有馬大夫ハ方ハ功者ハ中ハ
某木の実柱立山等を
人を仕新ハ
共不ハ樹を立んと思ハ先ハ自然と生立
樹共を点検ハ中ハ
殖れハ長し栄ハ夫を
地ニ不應の物ハ可栄
ハし此人の行ハ
下民ニハ夫ハ職業を
ハ人の栄を

ハ能ものれし事ハ武質朴なりしを支振の人を
見立く業にせられし事ハ名譽有古ち
理りなれ右傳ちを丈ハ十万石を拝領実父ハ大河内金
右衛門と僅三千石の身上也大名の子も可生業
ハ生を養子にされし者能く見出れ多不多
と人々云

私曰伊達中養子ノ賛前巻武野燭譚其條ノ
記録に載る処本文ノ意ト齟齬ス可参考

一板倉防州へ出入の町人防州に問云舟の足を見
る者ハ富と戸傳に舟の足少戸ハ如何なる物にて候哉

問防州答云何ハ有共不見也問
人不知と答防州云舟の足とハ別の子に舟を
舟を漕去可見と思ふ岸へ志し櫓械に精を入
漕時ハ如く走を不へ見多也唯うつくを漕出
時ハ必見場を不知しうち大成ハ身を乗ふ物も玉
きり見ぬん世渡を舟に喩ハ世渡をたとえば譬
るを云也世間各自然の足不多者出漕
見んと日数勤精時ハ必思ふ不れ見多也うつく
少を育んハ已ノ行先を知候舟を漕に似うち
角者多の譬に風波の難に遇て来を過た此足

理を考て万事をあらハ乾刈舟の迅を見付て
富ましへしと仕答し最確言と云事なり
一皆人の云事ハ昔の人ハ強健ニメ長寿也今ハ
人ハ生質弱ク仍夭殤多し然ニ石谷長門入道
土入と云老人聞之云夫ハ子細有今古の論ハ無
有へくと雖永世長寿ハ昔も稀なる事と思云説也
るに昔も強弱の二ハ有今世ハ弱ハ
多く強ハ少し昔の弱者ハ皆死ノ徴の如く成ハ
と見て彭祖云り今の人皆弱きハ悉く死ノ徴なハ
殘るへし然れハ後世ハ又今ハ強し然ハ

しハ実ニ事也
一或人一ツの前髪を落て鳴田障ニ入道而也
ハ談しきるハ遠也云物ノ時名有元服ハ人生
の始大事也皆也早く落也ハ諸人を也長人のと
接扱を其時若輩ニ成ハ慎を應對ふ如今ハ慎を
を人をハ閑法者也と思ふ又時ハ遠を生を落
也ハ前髪有形ハ諸事功者ニ見ル故ニ他人の
眼ニハ功者を目ハ如ク見ル故ハ是を抜刺
ハを殘り人をスツハの抜ハ人ニ抜ル也然れハ元
服ハ時皆の相應有ル生付の大小と智鈍

丹仍重述能程不可有也抑人ハ始て目を付
種苗処ふ離れこゝ多坊習ハ元彼可知家を
多生迷ひ此心時を流れ悪家に如此実し
早る業皆親の子丹生ふ心分時を流しかも也
一同人云人ハ才此様ハ仍心を夫に移る物多ハ可惜
事也雲ハ短く荒き物我為し以を地郎に別
嚴し異家丹他れハ詞の意対を自然を然く見
ヨ又義男の新伐女を云く他れハ自ら長神のなく
為あ也田夫野人こふ限いか程度の人も多の不
あしり徒を公儀為のるし又度くの人を度下

し鍬を取せ業を為かたゞせん二事為百姓也去
丹仍人ハ家の様ハ随を実家ハ他れハ心業ハ
風ゝ家家を正しを事れハ心も正家為物也見為ハ悪
しきに交れハ似合心ハ見を悪を思人共家
ふ知移り事ハ情を多種を考えて多孫義
肝要也堂ニ戸し
一同人云為を人の能智ハ不云ハ凡見多ものも也
ハ並居者能為ものハ必並合第一生ゝ智有ハ並ニ
生し又色芸者能一癖有ものハ何時も人分引
色居者也馬も人倉馬の癖分引色居者を産

家光卿之所者ハ如何様心の如きや馬庵答
者の至一応を不奇ノ図絵れ不堂るや也又人の名を
冨不大方心の一ツ〳〵付物也出る色者ハ如色多
る名付信者心の者ハ名も小く心の勢を燃あれ
ハ色有白衣者を好ミ紋を大ニ付ル実風ハ実体れ
百名を付也

一望遠鏡（トヲメカネ）と云物ハ国分渡初る頃世不挙ハ者
既者京 様子様分紀伊大納言殿へ目掛る者
大納言殿殊外ハ称ハ国許の櫓へハ揚り不
〳〵ハ境ハ内秘蔵浅の〳〵ハ者曲情外遥の向を
ハ家士通り者ハ眼鏡ハ者ハ覗し其人の名ハ
紋を也者〳〵と見へ京師の〳〵ハ見へ〳〵れハ内機
嫌ハ斜雖彼も見ハ者ハ者ハ奥し也〳〵ハ者ハ
安筈者ハ出仕有しハ此目か祝の事ハ吐有て
者ハ見せ終るハ者ハ何共ハ者ハ者ハ自鏡
者ハ交携出ル者ハ の間者居ハ者ハ付ハ〳〵退出せ
る大納言殿是者ハ受ハれハ内ハ性者人ハ伝ハ
者ハ不心付ハ跡ハ付ハ〳〵ハ者ハ者ハ〳〵の事ハ
内ハ図の如く仕ハれハ者ハ也ハ宿ハ〳〵ハ者ハ
〳〵ハ小性ハ者見付ハ者ハ殿ハ者ハ気も要ハ

と思ふ各様に付き心いとゝ見へに金を拵へ多く伝
龍鏡とゝ名へ敵の陣場或ハ舩中抔に覚又ハ歴
名ハ麦林遠山等を以覚とゝへハ此度の事也扨ゝ
万物共に用ゆ抔に仍融和茂ゝ江戸に今表に影
の如く此物下を以覚有之ハ此の
外多害に至所以ハ大守等人を擢み光を掩
下に抔に子孫に此覚と承候ハ下との者彼を通
並ゝへし指南り光斗も下に抔如に其上下と常
く不仕法多く酒興等に ハ色と笑戯とする有
之夫を等多事を以ゝ一に此の為みに影

ゝ某抔も陰の善し此覚を以ゝ
其他に茂に見限に者多く出来の仕に吳国の
聖主賢王ハ下に抔子を主と見守りと冠を目箍
主下ケ左右に耳金を以鈴の如ふ一国を治めの
君ハ此料等可有之候と江戸上大納言殿に
事ハ江戸也共流名名器の君多く此諫を此度の仕ハ
主目鏡の事再に詞も出なと也此常刀事
様現様法目金を以大納言殿に幼少分附を
ゝ子孫の人を也ハ係る憚有ゝ此諫に江戸上事
理り也と

一信長ニ小姓森蘭丸ハ刀ノ鞘ノキザミヲ第ヘ覚ミ事
前巻ニ出仍爰畧

一或古老云人毎ニ当世ハ出世ノ至無シト決定シ居る
相示云人多シ左相ハ出世ト云人毎ニ徇ル上ハ
左相ニ思ハヘレ共底意ハ出世ト云ハ世ノ為ノ世ノ為ノ
極老ニ仕奉ル中ハ何ニ出世ニ成ベキ筋目ハ無シ
ト雖人間ハ多ク死ル中ニモ其報ハ不離道理ナリ
其底心刈勇共忠共義共ハ士者ノ業ニ誰ニ稲
病ニ成ル人ハ思ハ人ハ多シ是モ徇ル上ハ勢ヒ思ハ
無底ニ長惜ル業ハ事ニ臨テ稲病ハ働ヲ成
ス是ハ云出世ト云同理也此底心中ニ相歌心

歌ハ歌ル不知ル也中ニ語シ
一土井大炊ノ云人ハ到不見ハ多雑ル物也雑ハ
客ル是ニ対面スル云閑ヲ暫テ能人モ書院
ヘ通ル有又云冥ル書ルさのヲ能ト思モ書
院ル見ル人有ル云冥書院共ニ別条ナシ
居間ヘ通シ語ル感シ入ル人有ル人ニ仮初
暫テ善ル悪ル共語利シ雑ル物也先ハ
人ル云閑ノ記ノ肝要也子細ハ居間ヘ通ル人ハ
十人ニ一人書院ヘ通ル人ハ十人ニ三四人其外大方
云閑也老ル中ニ暫ハ皆云閑也ル人ハ書院居間

みて見直さるゝ人も肝心の玄関あるべきれハ初ニ
見苦さるゝ様損ぜざる者ハ家業を能嘗業さるゝ也
堂ヶされし

一國持大名為さる人ハ蒸絲を第一ニ仕立せるゝ或
時國中みて白鳥の付い沼を警場中て殺生禁制
被立れし不法者有之彼白鳥を盗ゝを鳥見の
者見を見咎家老へ訴ニ仍彼盗人三人捕へて
牢舎ヶ付北由大守へヶ上る処ゝ鳥を盗きり
学ゝ人を教さんハ道理ニ非ずして其科人を追放
ヶ付人皆ゝ感心を感しきる丹或老人見を難し

て云人と鳥を殺難しとの事尤の振舞れ共夫ニハ
ゝ細ゝ今度の事ハ左ニ非ゝ鳥ハ怪しと魚國禁
を犯ゝの科重し國主蒸絲と云不の法ゝ
規矩を過ゝ故を見ゝ人多盗人追ニ出ゝ来ゝ竟
ハ人多く殺されゝんと批判しきるゝ案の如一方
年ゝ多く鳥盗人殊外多ゝ捕皆ゝ罪
ニ行ゝ条ゝ

一或大名例坊主を除ゝ仕ゝれしゝを中ゝ毎一人持
多ゝ者を共ゝ者ゝ家業ゝ分ゝ扶持を毎ゝあるこの
云其者ハ家中ゝ貧食困いゝし居きるを主人伺

聞き物の者也少き三人扶持加増せられし皆人
仁恵の徳を感ける に傍の古老眉を顰め夫
能所宮議のよるべく社伯家と昔示 大名答
て宮諏訪ハ不及共 毎年両の所を遣 仍也と
ア彼主人云夫ハ如何 我ハ世に言て味の坊主とも
夫こ扶意の仕様 扶ア主る意し然共其共家扶
宮毎毒多和とも あ意こ育ん彼坊主ハ若し身禁
勇者なりて指切ア主るこ世を世俗の沙汰を不及却て
世不実なもて為ア主る 俗を其世紀時なく只国家を
のこ少なくなる此者こハ除の坊主ハ根を生し世意

延 この後自他とも ア主れハ大名最端せれ
言潜示を少金延り 彼坊主大酒候の無仕法を
友ア主こ歩ア主れ意 主人甚悔色し少也賞四討
ハ仮初ア主るの相ア主れハ能少礼て可有係く古老
の言宮ア主る
一武大名ハ去年招請の時山海の珍味を尽メ答を
ア主る 其外五鯉の利身有 列衆 格別の接待も無
りしを 柳沢出羽守 此鯉を養ア主 其ハ世を江乃
名相と云い遠不の世 毎年出奔の儀こ世 其
ハ淀鯉の法分世を ア列 流写之 某 等ハ兵

格別の風味と申す事にて候ハ奈何と申されハ羽州
云條の鯉ハ美酒に浸さゝ数遍と及ハ其汁濁淀
鯉ハ不然幾度浸メも汁濁ラすハ
亦至方に成写之て祝品せられ者也
一上総の國の百姓木山を論ノ陳々と論を結論を
度々鎌倉研究一揆をあらし既雖儀に及ぶを伝伝
左衛門尉代官に訴代官の僉議あり恨を雖く
江戸評定而公勢比山論色々と六ヶ敷事仰付
無異義の而ハ山の頂分杉下を立曲尺の間に猶
吟味あり書しても雖決先ッ豊前の者を召合せ対決

せし先説文書を以体を召出雖弁時に松平伊豆
守殿之山の出尺の仕形を考検使を遣しを
見を改まるに先其山岳頂に采配等の目印を
立而二人を出あ西間三間の竿に采配の目印
を付山の頂分次第に杉下り松竿の印と山頂の
下と見合て同様の時山上の者に互に参を合
竿を持参る出其所に立為り頂分爰を何間
何尺と猶又山上の印を立而を杉下り立竿の
下を取分下ヶ竿茶の如ク何間と積り所に不写尺
を書記し杉下を下竿迄間何程と積み少し差ア

事無ク仍此之事述ヘ時所者ヲ
一秀忠公時雪殺の時右ハ山右ハ切岸の細道ニ
馬乗ル通ル也石谷長つ此馬副ニ此供ヲ
ヽ切岸の方ヘ柳へ物者るとて係り拵へる山
の方ヘ此落馬有上ニ此落馬と申ハ後ヲ引ヲあれ名
地名ヲ稱ヲ今ハ石谷ハ今や此ヲ討あるとヲ
の体なる不公方ヲ立ら未ハ笑有ク長つ係り
家伝大事ヲし事ヲ落馬ヲ也者ヲ嘆ヲ然ニ
ん者ヲ学ヲし事少も痛ヲ無し長つ此砂掛へ
ヲ仰けらるヲ

一家光公ヲ酒ヲ右上ハ鉄子の中ニ有し蝿一匹
ヲ盃ヘ入し ハ此酌の小性元其侍鉄子ヲ改ル者
ヲ酒仮の者共ハ何ヲ知ヲ付殊外迷惑仕ヲ
咎の程ヲ何無ヲ上ヲ言ヲ其侍人共ハ殊
暑ハ有人ヲ勝手ヲ持ル ヲ酒の事ヲ奥て
蝿の入し ヲ仮等ヲ重ニ不及ヲ仕者
一陸奥ヲ政宗殿中ハ陸ヲ松又四郎ヲ云ハ強
ヲ士ヲ対し事ヲ程ヲ又四郎極ヲ事政宗の
形体ヲ政宗ヲ指て笑ヲ扱も男也ヲ事ヲ奥也
殿ヲ帰儀仕ヲ家ヲ片倉小十郎ニ右の事ヲ語扱

危きもの多しり小舟者を拵へ事ニて云し
面白くをかしと思ひ倉屋敷を最た
拵へて住居ス仙台小身衆ニ内ニ種々話し拵ひの
ものの事ハ少者なし
此条前世ニモ出タレ共片倉カ言葉ニ仍爰ニ再筆

一家老石川代右衛門小田原城主稲葉丹後守死去
息義濃守家督ニ付堀田加賀守ニ小田原へ移ス
遣ハスと内証定の不ニ加賀守ハ上ハ丹後守事人好
故能き先世ハ除多拘ニ私儀ハ既今最立の者
家士共ニ不切ふ集内人者計ニ以ハ大切の場所ニ

以下内儀法為如何ニ事柄ハ吳候守ハ多ニ世
以ハ共家士切者多ク取立ハ彼切ハ之仕義濃守
内ハ酒井讃岐守ハ私共ハ内ハ如何ハ仕付ハ
言上ス上ニ義ニ異ニ異ニ之通ニ被仰付者也と堀田
の世言人ニ感之と云

一江戸城中時計幾箇も有者ハ時計の仕為
者ハ如ニ宛の生し有し而ハ以て時刻不揃故
台徳院様御意ニ時計者只一ケ所ニ太鼓を撞
て時を知せと仰ニ仍其通ニ成ハ別限人ハ云

不申ハ、

感入録畢

日本政府圖書

内閣文庫

昌平坂

翁草 巻之八十四

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan